

1. さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。
2. 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。
3. 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、
4. 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。
5. そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。
6. それで私たちは、テトスがすでにこの恵みのわざをあなたがたの間で始めていたのですから、それを完了させるよう彼に勧めたのです。
7. あなたがたは、すべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちから出てあなたがたの間にある愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富むようになってください。
8. こうは言っても、私は命令するものではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の真実を確かめたいのです。
9. あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。
10. この献金のことについて、私の意見を述べましょう。それはあなたがたの益になることだからです。あなたがたは、このことを昨年から、他に先んじて行なっただけでなく、このことを他に先んじて願った人たちです。
11. ですから、今、それをし遂げなさい。喜んでしようと思ったのですから、持っている物で、それをし遂げることができるはずで。
12. もし熱意があるならば、持たない物によってではなく、持っている程度に応じて、それは受納されるのです。
13. 私はこのことによって、他の人々には樂をさせ、あなたがたには苦勞をさせようとしているのではなく、平等を図っているのです。
14. 今あなたがたの余裕が彼らの欠乏を補うなら、彼らの余裕もまた、あなたがたの欠乏を補うことになるのです。こうして、平等になるのです。
15. 「多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがなかった。」と書いてあるとおりです。

説教

初代教会の時代にも自然災害で飢饉が起こったことが記録されています（使徒 11:28）。それを見ると、アガボという「預言者」が「世界中に大飢饉が起こる」と聖霊によって預言し、それが「クラウドオの治世」（紀元 47 年？）に成就します。その時、アンテオケの教会は、「それぞれの力に応じて（kaqw.j euvpore,w : 精一杯の意味）ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決め」、バルナバとパウロを派遣します(29-30)。初代教会に於いてはこのような「交わりコイノニア (koinwni,a)」が活発に行われていました。

このような「交わり」は、ペンテコステでキリストの聖霊が弟子たちに降臨した際に、エルサレム教会で最初に形成

されました。彼らは「一切の物を共有にし」ながら、「資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配して」いました。こうしたエルサレム教会の「交わりコイノニア(**koinwni,a**)」に触発されて誕生したアンテオケ教会は、疫病も恐れずキリストの命令に従って隣人のために黙々と奉仕するので、町の人からは、カイザルの親衛隊がカイザリアンと呼ばれたのに対してキリストの親衛隊を意味する「キリスト者クリスティアノス(**Cristiano,j**の意味)」と呼ばれることとなります。そして、世界的な飢饉の影響で母教会のエルサレム教会が逼迫するや、すぐさまパウロとバルナバを派遣して経済的な援助をしたのでした。既に昨年の夏にシリーズで何度も説教したように、これが「交わりコイノニア(**koinwni,a**)」です。教会が「我は信ず」と代々告白してきた「聖徒の交わり」です。それは、神から受けた恵みを互いに分ち合うことを意味します。エルサレムから霊的な恵みを分け与えられて誕生したアンテオケ教会が、今度は母教会の危機に際して、自分たちが神から与えられている金銭を彼らに分け与えて彼らに奉仕する、それが聖書の教える「交わりコイノニア(**koinwni,a**)」です。全世界のあらゆるキリスト教会の母教会として祝福の基となったエルサレム教会でしたが、飢饉に加え、ユダヤ人からの迫害もあって、経済的に度々逼迫していました(使 20:3-4, 24:17)。それで、アンテオケ教会のみならず、ローマやコリントなど各地の教会からの経済的な助けを必要としていました(コリト 16:1, ロマ 15:26)。それでパウロは、コリント教会に最初書き送った手紙の最後で、エルサレム教会への献金をアピールしています(コリト 16:1-3)。そして二度目に書き送った手紙に於いても、8章・9章と、実に二章にわたってエルサレム教会に献金するようアピールしているのです。

他の書簡には見られないにもかかわらず、パウロがコリント教会にだけこのように献金をしつこくアピールする背景には、コリント教会が要するに献金しない教会であったという事実があります。結局、コリント教会を牧会した際にはパウロは無給で奉仕しました(コリト 9:12,18)。それで、パウロは、コリント教会を説得する方法として、「マケドニアの諸教会」を良き模範として「知らせます」(コリト 8:1)。マケドニアを代表する教会はピリピ教会ですが、彼らはパウロをととてもよく支援して励ました模範的な教会でした。

それでは、パウロはコリント教会の信徒たちにどのようなピリピ教会の模範的な姿を知らせたいと思ったのでしょうか。それは、一言で表現するならば、「神の恵み」に満ちた、恵まれた彼らの姿です(1)。彼らは決して経済的に豊かではありませんでした。むしろ、「苦しみのゆえの激しい試練の中(**evn pollh/ dokimh/ qli,yewj** “潰れてしまいそうな物凄い試練”が直訳)」と「極度の貧しさ(**ba,qouj ptwcei,a** “貧乏のどん底”が直訳)」にありました。それなのに、自分たちが窮乏のどん底にありながらも、それに負けることなく、打ち勝って、「喜び」に「満ちあふれ」ていたのです。彼らは、激しい試練の中にあっても押し潰されることはありません。貧しいからといって絶望することはありません。むしろどんなに苦しくても、どんなに貧しくても、彼らは喜んでいました。しかもその喜びは普通の喜びではありません。自分が喜んでそれでおしまいという喜びでもありません。彼らの喜びは「満ちあふれる」ほどの喜びでした。「あふれ出る」ほどの喜びです。つまり、彼らの喜びは自分たちを満たすだけのその程度の喜びではなくて、自分を満たすのみならず、自分から溢れて他の人をも満たすほどの喜びだったのです。それで、その喜びを自分の中だけでしまっておくことができず、何かの形でそれをあらわしたくてあらわしたくて仕方なく、じっとしていられなくなったため、その彼らの喜びは「惜しみなく施す富となった」のでした(2)。彼らは、神の恵みを受けたので、嬉しくて嬉しくて、嬉しさのあまり神に恩返しがしたくなりました。あるいは、自分が神から恵みを受けた喜びを他の誰かと分かち合いたくて、それを「惜しみなく施す富」としてエルサレム教会に献金したのでした。「惜しみなく施す **a`plo,thtoj**」は「二心抱かぬ、誠実な」の意味です。神から恵みを受けた喜びを、包み隠さずことなく、真っ直ぐ、ストレートに、献金として彼らが表現したことがわかります。マケドニアの教会の兄弟姉妹は、人から強いられてではなく「自ら進んで」、それぞれの「力に応じ」、否それどころか彼らの持てる「力以上に」献金をささげて、「聖徒たちを支える交わりの恵みにあずかりたいと熱心に」パウロに願います(3-4)。

パウロはここで「献金」のことを「聖徒たちを支える交わりの恵み」と呼びます。エルサレムの貧しい教会を経済的に支援する「献金」のことを「交わりコイノニア(*koinwni,a*)の恵み」と呼ぶのです。つまり、「献金」は「恵み」なのです。パウロにとってもマケドニアの教会にとっても、「献金」は「恵み」です。それは「聖徒たちを支えるディアコニア(*diakoni,a* 仕える)交わりの恵み」です。自分が神から受けた恵みを喜んで隣人に分かち合う恵みです。それは「あふれる」恵みなのです。自分を通して神の国とこの世界を満たしていく神の恵みです。私たちの見た目の世界では、自分が稼いだものを献金して人に施す、というように見えます。でも、それは同時に、神から見たら、神ご自身が私たちに惜しみなく与えてくださった恵みはその人を満たすのみならず、その人から満ち溢れて他の人を満たしていく「恵み」です。「交わりの恵み」です。「聖徒たちを支える交わりの恵み」なのです。そして、パウロは、マケドニアの教会の兄弟姉妹を満たした「恵み」が、コリント教会にもあるよう願います(7)。「信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、愛にも富んでいる」彼らが、「この恵みのわざにも富むようになってください」と願います。言わば「献金」以外の「すべてのことに」富んでいる彼らが、「献金」にも豊かに恵まれて献金するよう願うのです。

パウロも言うように、これは「命令」によって強制することはできません(8)。その人の中に果たして「神の愛」が本当に存在して彼を生かしているのか(神の愛の正統性 = 「愛の真実」)が問われます(8)。そして、私たちが豊かに生かす愛こそ、私たちのために貧しくなられたキリストの愛です(9)。パウロは、「**あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っている**」と言います。キリストは、神でありながら、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、人となられました。しかも、罪人の身代わりになって、罪人のように死んでいきました。死刑囚の死を死なれたのです。キリストが、貧しく、人となってこの世に来てくださらなければ、しかも罪人のように十字架で死んでくださらなければ、私たち罪人は誰ひとり救われることはありませんでした。神の怒りと呪いを受けて、滅びる以外にありません。でも、キリストがこの世に来て、私たち罪人の身代わりとなって十字架で死んでくださったことにより、私たちは救われました。この喜びは金で買うことのできない喜びです。サタンも奪い去ることもできない喜びです。どんな困難も、貧しさも、地震も、津波も、放射能も、たとえ死でさえも、この喜びを奪い去ることはできません。私たちは、この「キリストの恵み」を受けました。しかも、豊かに、豊かに、いくら強調しても足りないくらい豊かに、限りなく受けました。だからこそ、マケドニアの兄弟姉妹は喜んでいました。酷く激しい困難にも押し潰されず、貧乏のどん底にあっても、喜び満ち溢れておりました。そして、その喜びを、「献金」という形で、「聖徒たちを支える交わりの恵み」としてあらわしました。人を助けて、自分たちが受けた神の恵みを分かち合ったのです。そして、イエスさまは、マケドニア教会のみならず、コリント教会、そして私たちが恵み豊かに「富む者」となるために「**貧しくなられました**」。恵み豊かに喜んで「この恵みのわざにも富む」者となるよう「**主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました**」。私たちも同じではないでしょうか。

神から受けた恵みを「献金」としてあらわしたいと思います。パウロがコリント教会の兄弟姉妹に言ったように、「信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、愛にも富んで」、言わば「献金」以外の「すべてのことに」富んでいる私たちは、「この恵みのわざにも富む」者と「なりたい」と願います。使徒パウロがそう「なってください」とお願いするので、そう「なりたい」と思います。

特に、被災地の教会を支援したいと思います。牧師が別の地に避難して閉鎖した教会にも同情を禁じ得ませんが、被災地に残って伝道している牧師夫妻は困難の中にあります。会堂建築したばかりなのに、津波ですべて失われて、借金だけ残った教会もあるそうです。それでなくても東北の田舎で地道に伝道してきた教会から信徒が疎開していなくなってしまって、経済的に困難な中にあります。長期的な支援が必要となると思います。できる限りの支援をしていきたいと思ひます。